



**Data**

監督・脚本：カリン・ペーター・ネ  
ツツアー

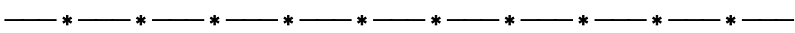
出演：ルミニツァ・ゲオルギウ／ボ  
グダン・ドゥミトラケ／イリ  
ンカ・ゴヤ／ナターシャ・ラ  
ーフ／フロリン・サムフィレ  
スク／ヴラド・イヴァノフ

👁️👁️ みどころ

ルーマニア・ニューウェーブの本作が『4ヶ月、3週と2日』（07年）の  
カンヌ国際映画祭制覇に続いて、ベルリン国際映画祭を制覇。こりゃ、『黄色  
い大地』（84年）、『紅いコーリャン』（87年）による、チャイニーズ・ニュー  
ウェーブの抬頭と同じ現象だ。

そのテーマはポン・ジュノ監督の『母なる証明』（09年）と同じく、過保  
護な母と自立できない息子との確執。交通事故で14歳の男の子を死亡させて  
おきながら、謝罪すらできない三十男も見苦しいが、コネとカネによってもみ  
消しと偽証をはかる母親はもっと醜悪。

そんな、どうしようもない母子が見せるラストの結末は？そこにわずかの希  
望が見いだせるからこそ、この評価に！



■□■あれもルーマニアの傑作だったが、これも・・・■□■

『4ヶ月、3週と2日』（07年）という変わったタイトルのルーマニア映画は、200  
7年の第60回カンヌ国際映画祭でルーマニア初のパルムドール賞をもたらした傑作（『シ  
ネマルーム18』334頁参照）。そのテーマは、第61回ベネチア国際映画祭で金獅子賞  
と主演女優賞を受賞した『ヴェラ・ドレイク』（04年）（『シネマルーム8』335頁参照）  
と同じで、人工妊娠中絶問題だった。

1989年12月の「ルーマニア革命」によってチャウシェスク政権が倒れた後、民主  
化が進められたルーマニアでは、1990年代はじめからやっと自由な映画が作られるよ  
うになった。そして、2000年以降、30代の若い監督の作品による「ルーマニア・ニ

ューウェーブ」が起きる中、クリスティアン・ムンジウ監督による『4ヶ月、3週と2日』のような傑作が生まれたわけだが、ルーマニア・ニューウェーブの若き旗手、カリ



(C)Parada Film in co-production with Hai-Hui Entertainment All rights reserved.

ン・ペーター・ネットアー監督による本作は、それに続いて2013年の第63回ベルリン国際映画祭で金熊賞（最高賞）と国際映画批評家連盟賞の2冠を受賞した傑作だ。そして、そのテーマは「チャイルズ・ポーズ（胎児の体勢）」という英題（原題も同じ意味）からわかるとおり、「子離れできない母」vs「自立できない息子」。

## ■□■そのテーマの名作は多いが・・・■□■

そう聞くとすぐに思い出すのが、韓国のポン・ジュノ監督の近時の傑作『母なる証明』（09年）。『母なる証明』は女子高生の殺人事件を巡って、母親と（バカ）息子との（ケツタイな）絆が描かれていた（『シネマルーム23』131頁参照）が、本作は車の運転によって14歳の男の子を死亡させた交通事故の事件を通じて、ルーマニアの首都ブカレストに住むセレブな母コルネリア（ルミニツァ・ゲオルギウ）と30歳になってもなお自立できない一人息子バルブ（ボグダン・ドゥミトラケ）との確執が描かれる。

本作のプレスシートにある、斎藤環氏（精神科医）の「映画『私の、息子』に見る親子の相克」によれば、「我が子の前に立ちふさがる障害物を先回りして取り除く過保護な親のことをスウェーデンでは『カーリング・ペアレント』と呼ぶ」そうだ。すると、本作のコルネリアは「モンスターと言うよりは、さしずめ典型的カーリング・マザー」ということになるらしい。そんな過保護タイプの母親は、今や日本国中に充満しているが、「通常は、こうした溺愛と母子密着はセット」になっており、さらに、「母子密着とセックスストレスは密接な関係がある」というからすごい。

冒頭、コルネリアが親戚のオレガ・チェルケス（ナターシャ・ラブ）に対して、バルブがシングルマザーの恋人カルメン（イリンカ・ゴヤ）とベツタリなことにグチをこぼす

シーンは、世の中のどこにでもある風景だと納得できる。しかし、その段階でも、バルブの母親に対する反発ぶり・反抗ぶりは度が過ぎている。中学生の男の子が、親にキレたらこうなるだろうと思うような姿を、髭をはやした三十男が堂々と見せるのだから、そりゃ驚きだ。本作がすごいのは、交通事故発生後の、コルネリアがバルブに対して見せるカーリング・ペアレントぶりだ。私は弁護士として交通事故による損害賠償事件の処理を40年間やってきたが、それは「法治国家日本」であってこそその処理であって、「ルーマニア社会では、こんなことまであるのか!」と唾然とさせられる。

邦題の『私の、息子』もほぼ原題のイメージを踏襲しているからそれはそれでいいのだが、この母子関係を見ていると、ついイライラ……。さあ、カリン・ペーター・ネットアー監督が描いて、金熊賞（最高賞）と国際映画批評家連盟賞まで受賞した本作に見るコルネリアのカーリング・マザーぶりに注目！



(C)Parada Film in co-production with Hai-Hui Entertainment All rights reserved.

## ■□■ウクライナをはじめとする、国際情勢の3つの焦点は？■□■

去る5月25日に実施された大統領選挙によって、ウクライナでは親欧米派のポロシェンコ元外相が選出された。当選直後、新大統領は「武器を持って人を殺しているテロリストとは交渉しない」とウクライナ東部で活動している親ロシア派武装勢力との対決姿勢を鮮明にしたうえ、その直後にはウクライナ空軍によるドネツク国際空港を占拠する親ロシア派武装勢力への空爆に踏み切ったため、戦闘は激化している。

他方、タイでは5月22日の軍事クーデターによって、インラック首相が拘束される事態に発展。タクシン派 v s 反タクシン派の対立のみならず、軍事政権の行方は予断を許さない情勢になっている。また、南シナ海の西沙諸島近海での中国の石油掘削作業開始によって発生した、中国 v s ベトナムの対立も、中国が石油掘削作業の第一段階の作業を終えた今、100隻以上の船舶が行き交い、紛争は激化の一途を辿っている。

この3つが目下の国際情勢の焦点だが、1989年のルーマニア革命から25年を経た今、ルーマニア社会は一体どうなっているの？

## ■□■「革命」後のルーマニア社会は？■□■

それは、プレスシートにある中島崇文氏（学習院女子大学准教授）の「映画『私の、息子』にみる現代ルーマニア社会」を読めばすぐにわかるが、本作導入部にみるルーマニアの首都ブカレストに住むセレブリティ、コルネリアの誕生パーティーの華やかさを見ると大きな違和感がある。1980年代後半から急速な改革開放政策を推し進めた中国では、貧富の格差が著しく、大金持ちはトコトン大金持ちになっているが、ルーマニアにもコルネリアのようなセレブがいたの？アメリカでは『ブルージャズミン』（13年）『シネマルーム32』（27頁参照）で見たようにセレブの凋落も著しいが、裕福な建築家（現在は舞台芸術家）であるコルネリアは、その夫アウレリアン・ファガラシアヌ（フロリン・ザムフィレスク）と共に、相当の蓄えと人脈を持っているようだ。

人脈がモノを言ううえ、何ゴトも中国共産党と政府の権力がなければ動かない中国ではワイロが常套手段だが、本作を見ているとルーマニア革命後のルーマニアもそうだとすることがよくわかる。『ブルージャズミン』では、凋落してしまったかつてのセレブのうら悲しい姿をケイト・ブランシェットが見事に演じて第86回アカデミー賞主演女優賞を受賞したが、まだまだ「現役セレブ」である本作の主人公コルネリアの財力と人脈をもってすれば、バカ息子のバルブが犯した14歳の少年を死亡させた交通事故を穏便に処理することくらいは容易にできそうだ。

もちろん、それには交通事故を起こしたバルブ自身の反省と、適切な行動が必要だが、本作に見るバルブはコルネリアによる懸命な「もみ消し工作」にもかかわらず、それに従わないばかりか、それに公然と反抗！アレレ、こりゃ一体なぜ？

## ■□■警察も証人もカネ次第？その行き着く先は？■□■

弁護士稼業を40年間もやっている、「地獄の沙汰も金次第」と言われるように、すべての問題の最後の解決はカネ次第だということがわかってくる。民事事件では当然ほとんどすべてがそうだし、刑事事件でもそれは同じだ。例えば、窃盗などの財産犯はもちろん、傷害、殺人等の人身犯でも、「被害弁償」は刑を軽くして貰うための切り札になる。したがって、最初から多額のカネを提示することによって「被害届」や「告訴の取り下げ」をお願いすることは、「法治国家」たる日本でも、弁護士として当然果たすべき職業上の義務となる。しかし、警察上部にコネを使って便宜をはかってもらったり、関係者や証人等にかネを使って偽証を頼んだりするのは日本では違法。弁護士がそんなことをすれば、たちまち懲戒モノだ。

ところが、自らの過失で交通事故を起こし、14歳の男の子を死亡させておきながら、被害弁償はおろか謝罪すらしようとしないバルブのために、コルネリアは一体ナニを？母親への反抗心むき出して、「放つといてくれ」とふてくされる三十男は見苦しい。しかし、

コネを使って警察の取り調べの場へ介入したり、車を追い越した際の状況について証言者となるディヌ・ラウレンティウ（ヴラド・イヴァノフ）に偽証してもらうため、8万～10万ユーロ（ルーマニアの平均月収は300ユーロ程度らしいから、それと対比！）のカネを準備するコルネリアの姿はもっと浅ましい。

カリン・ペーター・ネッツァー監督はそんな母子のなんとも見苦しくかつ浅ましい姿を、これでもかとはばかりに容赦なく描いていくから、後半からクライマックスにかけては少し息苦しくなってくるほどだ。さて、コルネリアのそんなカーリング・マザーぶりはどこまで続くの？その行き着く先は？



© Parada Film in co-production with Hai-Hui Entertainment All rights reserved.

## ■□■チャイニーズvsルーマニアのニューウェーブは？■□■

「中国映画通」を自認する私は、陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『黄色い大地』（84年）（『シネマルーム5』63頁参照）と張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『紅いコリアン』（87年）（『シネマルーム5』72頁参照）によって全世界を震撼させたチャイニーズ・ニューウェーブのすばらしさをよく知っている。そんな私にとって、文化大革命直後の1978年に第1期生として彼らが入学した北京電影学院の訪問はもちろん、そこで2007年10月10日に実施した「大阪の弁護士坂和章平が語る中国映画あれこれ」の特別講義は思い出深いものだ。それから約30年。中国映画は政治、経済、軍事と同じように、今やアメリカと肩を並べるほどの規模になってきたが、同時にチャイニーズ・ニューウェーブと呼ばれていたときの新鮮さは失われ、ハリウッドと同じように大作主義、商業主義に偏っている感が強い。しかし、チャイニーズ・ニューウェーブから約15年遅れて、1990年から始まったルーマニア・ニューウェーブのすばらしさは？

中国は一党独裁体制の国だから、体制批判の映画を作ることはできない。したがって、

賈樟柯（ジャ・ジャンクー）を筆頭とする中国第六世代監督の多くは海外にその活躍の場を求めているが、さてルーマニアでは？また、本作のカリン・ペーター・ネッツァー監督はルーマニア・ニューウェーブの旗手だが、本作でここまで露骨にルーマニアのコネ社会や汚職社会ぶりを描いて大丈夫なの？ちなみに、ドイツのアウトバーンでは最高速度の制限はないはずだが、本作でディヌ・ラウレンティウが理路整然と述べる理屈を聞いていると、ルーマニアの高速道路では制限速度が110 km/h。そこでプレスシートを読むと、それはルーマニアがEU加盟国であり、EUの法規制に従っているためらしい。ここらあたりは、やはり共産党一党独裁の中国と、少なくともEUに加盟しているルーマニアとの違いだろう。

ルーマニアの社会情勢をほとんど知らない私には、プレスシートに書かれてあること以上のことはわからないが、そんな視点で1980年代のチャイニーズ・ニューウェーブと2000年以降のルーマニア・ニューウェーブを対比してみるのも面白いはずだ。

## ■ラストの被害者訪問と、そこに見る「変化」とは？■

本作のチラシには「お前は私のすべて、守るためなら何だってする。」という文字が躍っているが、これほどバカげた話はない。こんな、過保護の母親にホントに反社会的行動をとられたのではかなわないが、そんな母親の過保護から逃れようともがきながら、自立できない三十男の開き直りもかなわない。そういう意味ではバカな母親とバカな息子をトントン描いた本作がなぜ金熊賞に？そんな疑問が湧いてくるのが当然だが、その理由はラストの被害者訪問と、そこに見るある「変化」にあるはずだ。

被害者の家は農村にあるらしいが、そこは舗装されていないから、これを見ると、かつての中国映画と同じような香りがする。そこを訪問するためにコルネリアが運転している車が高級車BMWというのもきっちり対比する必要があるが、ここまでやってきてもなおバルブは車から降りず、被害者の両親宅に入るのはコルネリアと同行したカルメンの2人だけだ。ここで見せるルミニツァ・ゲオルギウの演技は、さすが「ルーマニアを代表する実力派女優」と感心させられるが、そこで涙ながらに訴えかける、息子自慢(?)はいただけない。こんなことを喋り続ければ、余計に被害者感情を逆撫でするだけだが、コルネリアにはそれすらわかっていないのだろう。

あくまでコルネリア流で頼むことだけは頼み込み、家を出れば後はBMWに乗って出発するだけ。そう思っていると、思いがけず、そこでバルブがとった行動とは？それが本作ラストの見どころだから、そこはあなた自身の目でしっかりと。これによって「やっぱり人間っていいものですね」などと歯の浮いたような感想になるはずはないが、この被害者訪問によってバルブに生じたある「変化」はやはり、わずかにばかりの希望を感じさせてくれるものだ。そんな、ルーマニア・ニューウェーブを代表する本作のラストシーンをしっかり味わいたい。